

北海道東部における材木の集積地

北海道の林業は、北海道全体の広大な森林により、明治・大正時代（1868～1926 年）の間に発展しました。

1899 年には、木材と農産物を海路で輸送するために、釧路港が開港しました。1901 年、釧路は、北海道中央部の十勝地方および北部の北見と鉄道で結ばれました。釧路は、北海道東部の交通の要所となったのです。

森からの丸太が鉄道で到着し、あるいは川を下ってくる釧路には、材木置場ができました。材木のほとんどは日本の他の地域や海外に運ばれましたが、一部は釧路にある工場で紙・パルプに加工されました。そのうち、いくつかの工場は現在も操業しています。

地面が雪で覆われる冬の間、丸太は、「バチバチ」と呼ばれる馬そりで、森から鉄道駅や川船に運ばれました。「バチバチ」という名前は、東北弁で「短い」という意味の「バチ」という語に由来する、という説があります。「バチバチ」の作りは単純ですが、役に立ちました。固定された長さのそり 1 台を使うのではなく、2 台の短いそりを丸太の前と後に結びつけて使っていたのです。2 台のそりは、どんな丸太にも合わせて調整でき、雪の上をなめらかに滑ることができました。